日本青年団新聞

Youth Post 増大号

ナイスファイト！

2026 vol. 4
111巻第4号　発行2026年11月1日

編集・発行 日本青年団協議会
〒160-0013
東京都新宿霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
seinen@dan.or.jp　https://www.dan.or.jp



第74回滋賀県青年大会 バスケットボール男子

各地の青年団は、道府県青年大会や地域のまつり、芸能文化活動など、さまざまな舞台で活躍しています。道府県青年大会には全国青年大会の予選会を兼ねるものもありますが、どの大会も地元の青年や地域、スポーツや芸能文化活動の裾野を広げるために大切に開催されています。本号では、それぞれの舞台に全力で挑み、仲間との絆を深める青年たちの「ナイスファイト」をお届けします。



第74回滋賀県青年大会 フットサル



第74回宮城県青年文化祭 意見発表



第74回滋賀県青年大会 舞台発表



第74回岡山県青年祭 剣道



第75回宮崎県青年大会 軟式野球



第74回岡山県青年祭 フットサル

INFORMATION　日本青年団協議会の最新情報はこちらから

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）とPost・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

ここから始まる、ナイスファイト

～戦った選手、支えた仲間、すべてに拍手を～　（岡山県倉敷市）

去る8月、**岡山県青年団協議会**（以下、岡山県団）主催の第74回岡山県青年祭（以下、県青年祭）が開催され、バスケットボール、軟式野球、剣道、フットサルの4種目が行われた。大会を支えた人の縁と、会場で生まれたつながりを追う。

◆人とのつながりから

広がった出場チーム

バスケットボールには、昨年を2チーム上回る6チームが集まった。きっかけは、岡山県団が主催する岡山サミット[※1]だ。かつて、県青年祭に出場していた人が参加。その選手が営むスポーツバーに役員が足を運ぶなかで、新たに2チームの出場が決まった。軟式野球は県内の自治体チームにSNSを活用した案内を行い、4チームがそろう。昨年参加者が集まらなかったフットサルは、日程をお盆からずらし、約15団体にインスタグラムで直接連絡。2チームでの開催を実現した。

◆運営に集う人の輪

運営にも、日頃の活動で結んだ縁が生きている。フットサルの審判は、加盟団員の知人が快く引き受けた。バスケットボールと軟式野球を同日に開いた会場には、2年前の能登半島地震ボランティア[※2]に参加した当時学生だった参加者や、祭りや子ども向け事業で出会った大学生が手伝いに加わった。これまでの事業で積み重ねてきた関係が大会を支えている。

◆勝敗を越えて生まれるつながり

軟式野球の会場では、足をつった選手を相手チームが素早く手当てし、自分たちの飲み物も分けた。フットサルでは接触プレーの後に選手同士が声をかけ合い、試合後には両チームが本部席と相手チームにそれぞれ一礼。スポーツマンシップにあふれる姿が各会場で見られた。試合後の交流も生まれている。フットサルの交流試合には八木雅弘岡山県団会長（26）も加わり、軟式野球では昨年の全国出場チームと今年初出場のチームが連絡先を交換した。

予選会の役割は、全国へ選手を送り出すことだけではない。勝敗を競いながらも、相手を尊重し、助け合う。職場や学校の異なる青年同士が出会い、関係を育んでいく。全国大会は、その先にある舞台の一つだ。地域で青年がスポーツに親しむ機会をつくり、その裾野を広げていくことにこそ、本来の意義がある。各地の予選会が充実してこそ、全国大会もまた価値を増していくのだ。

日々の活動で出会った人が、選手として、審判や運営の担い手として大会に関わる。この循環は、岡山だけの特別なものではない。地域とともに活動を続ける各地の青年団にも、同じ縁は育っているはずだ。その縁が東京へつづく。



炎天下の中、軟式野球の試合を見守る県団役員





全国への切符は2枚。試合開始前の緊張の瞬間



剣道大会終了後、全国大会の説明をする役員

※1「岡山サミット」……一般財団法人日本青年館と日本青年団協議会が主催する全国まちづくり若者サミットを自分たちの地域でも開催しようと始まった事業

※2「能登半島地震ボランティア」……6頁「魅力発掘」で深堀！

途切れた歴史を再び

～復活した全道青年大会～

（北海道札幌市）



70名を超える選手が集まり、熱戦を繰り広げた

かつて、道内の青年たちが集う一大イベントだった全道青年大会。軟式野球の部も盛んに行われていたが、2018年度に南空知地区で開催された第69回大会を最後に、参加申込がなく、長らく開催されていなかった。

その大会が、昨年再び軟式野球のグラウンドに帰ってきた。

きっかけは意外なところにあった。全国青年大会のSNSを通じて北海道の草野球チームの間で話題となり、「出場するにはどうしたらいいのか」という問い合わせが**北海道青年団体協議会**（以下道青協）に寄せられた。これを受け、予選会を開催できるチーム数が集まり、軟式野球の部が復活。昨年は46人が参加し、今年は札幌から2チーム、胆振から1チーム、計71人が集まった。

大会当日には、参加チームのメンバーが「僕たちやりますよ」と自らグラウンドの草刈りをする姿や、運営にも積極的に協力する選手たちの姿が印象的だった。

「スポーツをする喜びは、時代が変わっても変わらない。一度途絶えた大会を、もう一度大きな大会へ。将来は複数の種目を同じ会場で開催し、北海道の若者が参加できる大きなスポーツイベントとして定着させたい」と阪光平道青協会長(42)は語る。

かつての賑わいを、今度は新しい形で。全道青年大会の新たな歩みは、まだ始まったばかりだ。次は全国の舞台へ。



●大川 塁斗さん（北海道青年団体協議会　常任理事）より投稿　阪 光平さん（同会会長）取材協力
■お問合せ：北海道青年団体協議会　Mail:info@doseikyo.jp

担い手を育む獅子舞

～世代を超えて祭りを支える～

（富山県富山市）

富山県富山市・笹倉地区では毎年4月に地元神社の春季例大祭が営まれ、**笹倉青年団**の若者たちが乱声（らんじょう）獅子を舞う。大祭は朝7時から夜9時まで分刻みで動く。道順と時間の組み立てが最大の難関で、先行隊が次の訪問先に先回りして時間を調整しながら、婚礼など時刻の決まった依頼にも合わせていく。今年から団長を務める田中俊介さん(26)は「一人では回せない」と語る。

青年団の活動は春だけではない。夏は地域の納涼祭や妙順寺まつりで焼きそばを焼き、行事を支える。小学校の竣工式では演舞を披露して児童と太鼓や笛で交流した。

活動を支えるのは、世代をつなぐ仕組みだ。OBの七澤公一さんが提案した準団員制度をもとに小学生は子役、中学生は手伝い、高校生は獅子の胴を担い、高校卒業後に入団する流れができた。担い手が増えたことで3年前から東西に分かれて舞う2幕体制も実現している。

前団長は田中団長の姉の美咲さんだった。今年の大祭では田中家の婚礼で姉弟がそろって舞い元団員の父も加わった。練習の後にはOBと現役が食卓を囲む。同じ釜の飯を食う仲間に世代の壁はない。「さまざまな世代を巻き込みながら地域を元気にしていきたい」と田中団長は語る。



大ベテランから指導を受ける団員



地域活動ラボ

地域青年団は、その多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、さまざまな人との関わりを通して自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う若者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。

本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に関わった審査員自らが分析し、活動の社会的な意義を明らかにしていく。第13回目となる今回は、滋賀県の「CREW R.S.竜王町青年団」の「レクッサ(文化活動)」の実践について紹介する。

2025年度全国地域青年「実践大賞」

審査員 棚田 一論
(日本青年団協議会事務局長)

●折り紙モザイクアートで迎える「祝 国スポ 竜王町へようこそ!!」

滋賀県青年団体連合会 CREW R.S.竜王町青年団

【取り組み概要】

2025年10月3日から5日、44年ぶりに滋賀県で開催された国民スポーツ大会のスポーツクライミング競技会場・竜王町総合運動公園で、来場する選手や観客を歓迎する作品「祝 国スポ 竜王町へようこそ!!」を制作した。5月に滋賀県青年団体連合会が主催するスプリングフォーラム25で文化活動として作品づくりを決め、大会マスコットのキャッフィーとチャッフィーがクライミングする姿を、地元中学校でもなじみ深い折り紙のモザイクアートで表現。8月25日には巡回ラジオ体操の参加者とともに制作を進め、9月4日にいったん完成したものの、見え方が分かりづらいという課題が判明した。団内で議論のうえ設計図をつくり直して再制作。高校生以上の団員に加え、OBや県団役員、竜王町の関係者、団員の家族など約80名を巻き込み、地域一丸となって仕上げた。あわせて竜王町のおすすめスポットを紹介するカードもつくり、会場に展示。この実践は「2025年度全国地域青年『実践大賞』」で奨励賞を受賞した。



モザイクアートが思った出来栄えにならず、約2時間にわたる協議の末、再制作を決意

【解説】

CREW R.S.竜王町青年団の皆様、「奨励賞」の受賞、誠におめでとうございます。44年ぶりの滋賀開催となった国民スポーツ大会に合わせ、折り紙を用いた「おもてなし」の作品制作に取り組まれた姿勢は実に見事だ。多様な世代約80名を巻き込み、地域一丸となって歓迎の空気をつくり上げた点は、青年団らしい温かみのある素晴らしい実践であった。審査会では、ぜひ実物の作品を見たかったという声が上がるほど、皆様の情熱が伝わる活動だった。

注目したいのは、もともとは、町内の中学校で例年つくられている折り紙モザイクアートという、団員にとって身近な文化活動として企画がスタートした

第74回全国青年大会 地元の想いを背に、全国の仲間が東京に集う！

届け、ナイスファイト

参加者数(オブザーバー含む)
1,269人
34都道府県
11月13日～16日 開催

体育の部

バスケットボール	男子	308人	15人減
	女子	120人	28人減
軟式野球		394人	97人増
剣道	男子	96人	18人増
	女子	52人	3人増
フットサル		100人	7人増

芸能文化の部

写真展 1.6倍	21作品	8作品増
生活文化	13作品	5作品増
意見発表 2.8倍	11人	7人増
舞台発表 4.6倍	73人	57人増

伸び率上位3種目 ／ 増減・倍率は昨年(第73回)比

点だ。当初、国民スポーツ大会との接点はなく、活動の途中で団長が役員会で得た情報をきっかけに、竜王町教育委員会との協議を経て「歓迎の作品づくり」へと発展していった。地域のビッグイベントを、青年団らしい柔らかな発想で自分たちの活動に引き寄せていく力は、まさに地域青年団が持つ強みだといえる。

　今回の舞台となった国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会は、地域にとって数十年に一度めぐってくるかどうかという規模の機会である。普段の活動では出会うことのない全国各地からの選手や観客、大会関係者に「地元の顔」として向き合える機会は、青年団にとっても得がたい経験になったはずだ。ローカルな文化を、全国規模のイベントにあわせて活かした発想は、他の地域の青年団にとっても大いに参考になるだろう。



設計図を見ながら、模造紙に貼る折り紙の色を、事前に模造紙に記入する

◆折り紙が広げた多世代の輪

　制作の過程では、高校生以上の団員だけでなく、巡回ラジオ体操の参加者、OB、県団役員、竜王町の役員、団員の家族までもが、休日を返上して制作に加わった。ひとつの作品を仕上げるために、これだけ多様な世代・立場の人が机を並べる機会は、日常の地域活動ではなかなか生まれにくい。折り紙という誰もが手を動かせる素材を選んだことが、多世代を巻き込む間口の広さにもつながったのではないだろうか。

　もちろん、順調なことばかりではなかった。完成したモザイクアートが初見の人には分かりづらい仕上がりだったこと、教育委員会との調整不足から一部の展示内容を直前で変更せざるを得なかったことなど、いくつもの壁にぶつかっている。しかし、団員同士で意見を戦わせながら設計図をつくり直し、限られた時間の中で皆で取り組む態勢を組み直した経験は、今後の事業運営における大きな財産になるはずだ。教育委員会など行政との協議を重ねながら事業を形にしていったプロセスも見逃せない。青年団単独では実現できない規模の展示や広報を、行政との連携によって可能にした経験は、次に活動を計画する際の「早い段階からの事前相談」という具体的な行動指針にもつながっていくだろう。

　子どもたちにとっても、大人が本気で一つの作品をつくり上げる姿を間近で見る経験は、地域への愛着や将来への想像力を育む機会になったのではないだろうか。竜王町青年団が生み出したのは、一枚のモザイクアートだけでなく、世代を超えて手を動かし、地域の魅力を語り合った時間そのものだったといえる。

◆次の活動へつなぐために

　今後の期待として、今回の制作プロセスを通じて得られた「新しい仲間」や「ネットワーク」を、どのように次の活動へつなげていくのか、その広がりをぜひ記録し、発信してほしい。地域に新しい結びつきを生んだ竜王町青年団の次なる文化活動を、心より応援したい。



巡回ラジオ体操で、参加者とともに作品を作成





魅力発掘

もっと知りたい！

岡山県青年団協議会

今回は、岡山県青年団協議会（以下、岡山県団）が2年前の「令和6年能登半島地震」で行ったボランティア活動と、その経験を土台に今年9月に行った「令和8年熊本地震ボランティア」へと進んだ道のりを紹介します。岡山県団だけでなく、熊本県青年団協議会（以下、熊本県団）と宮崎県青年団協議会（以下、宮崎県団）も関わった熊本での活動の様子は、8ページ「震災復興×青年団」でさらに詳しく取り上げます。

●能登での経験を土台に

今年7月に発生した「令和8年熊本地震」。「平成28年熊本地震」から10年を迎え、復興の歩みを重ねてきたさなかの被災だった。岡山県団は同年9月19日から22日にかけて熊本県を訪れボランティア活動を行った。2年前に能登で活動したメンバーを中心に「熊本地震で被災した方のために何かできることはないか」という声が上がり、日青協の呼びかけのもと、熊本県団や宮崎県団と連絡を取り合って今回の派遣が決定した。その土台にあるのは「令和6年能登半島地震」での経験だ。

●「まずは現地を見る」から始まった能登支援

岡山県団は、能登半島地震発災後に県内でチャリティー餅つきイベントを開き、その売り上げの一部を石川県青年団協議会（以下、石川県団）に寄付した。しかし、寄付をしても被災地のために何ができるのかは見えなかった。相談した災害ボランティアコーディネーターからは、まず現地を見るよう助言を受けた。

4月には岡山県団6名が石川県団の案内で被災地を視察し、事後に県内で実施した報告会でボランティア派遣を提案した。実行委員会体制をとり、参加希望者とともに活動内容を練った。8月には高校生から社会人までの26名が能登へ向かった。輪島市で家屋の片付けや液状化した床下の清掃に汗を流し、珠洲市では石川県団と復興支援イベント「ももたろう市」を開いた。

●寄り添うことを学び、熊本へ

屋内の片付けでは依頼者が残しておきたい品をメンバーが廃棄袋に入れてしまう場面があった。早く片付けることよりも、依頼者に一つずつ確認し、思い出とともに整理できるようにすることの大切さを、身をもって知った。ボランティア後、メンバーはこの経験を岡山に持ち帰り、防災を考える取り組みにつなげた。2ページで紹介した県青年祭の運営を支えた当時学生だった参加者も能登で出会った仲間だ。

熊本での活動に向けては、能登での経験を基に、物資の選定やボランティア事前申込みなどの準備を行った。準備で心がけたのは、単に作業をこなすだけでなく、被災された方々の心に寄り添い、対話を大切にすることだ。能登で学んだ「相手の立場に立って共に考える姿勢」を熊本でも意識して活動に臨んだ。熊本入りした19日には、移動ルートやボランティアセンターの場所の確認などの下見後、夕方からともに活動する熊本県団・宮崎県団と合流して打ち合わせを行い、参加メンバーの確認や服装などの共有をした。現地を見て話を聞き、共に考える。岡山県団は能登で積み重ねた歩みを携えて熊本での活動に臨んだ。



輪島市災害ボランティアセンターを通じた活動。
液状化で床下にたまった泥をかき出す

●北村万梨子支局員（岡山県青年団協議会常任理事）協力

震災復興×青年団

復興に終わりはない——珠洲で未来をつなぐ青年たち

能登でも熊本でも、復興はまだ道半ばです。今号の増大紙面では、能登半島地震からの歩みを第41回石川県青年文化祭やのど自慢大会から伝えるとともに、「令和8年熊本地震」の被災地へ駆けつけた岡山県青年団協議会のボランティアを紹介します。地域に寄り添い、今を乗り越えようとする仲間たちの姿をお届けします。



のど自慢大会の開会式後、実行委員が舞台で湘南乃風の「睡蓮花」を歌い、客席側のメンバーも合いの手で会場を盛り上げた

8月8日から9日にかけて、石川県青年団協議会と珠洲市青年団協議会の主催により珠洲市で開かれた、石川県青年文化祭と「がんばろう能登!!珠洲のど自慢大会2026」を取材した。

能登半島地震から2年半余り。道路は通行できるものの、本復旧工事は始まったばかりだ。傾いた電柱や街灯、ブルーシートが残る家屋もあり、復旧はまだ道半ばである。

私は宮城県で東日本大震災を経験した。工事車両が行き交う道路や被災した家屋に、当時の記憶がよみがえった。一方、半島の先端に位置する珠洲市では、資材や重機を運ぶ道路が限られ、その道路自体も復旧途上にあるなど、能登特有の難しさも感じた。

そうした中でも、地域には確かな「元気」があった。石川県青年文化祭では、30代前半の青年たちが中心となり、幅広い世代が参加した。震災後、一度は楽器を吹けなくなった出演者は、「自分のためにやりなよ」という言葉をきっかけに再び演奏できるようになったという。参加者からは「祭りの再開が復興への第一歩。山車を見たときには涙が出た」との声も聞いた。

翌日の珠洲市のど自慢大会は、長年にわたり市民に親しまれてきた大会だ。当日は開場前から列ができ、小学生から高齢者までがステージに立った。運営は青年団員を中心に約30人が一丸となって担った。会場では、地域の人が青年たちを見つけると笑顔であいさつし、自然と世間話が始まる。そこには、青年たちと地域の人々が日頃から築いてきた関係がはっきりと表れていた。移住後に青年団に加わった団員も「地域の人が温かく、すぐになじめた」と話す。青年団という枠を越え、地域全体に人と人との強いつながりが根付いていることを感じた。

「能登は祭りが命みたいなところ。祭りが生きがいで、そのために帰ってくる人もいる」と話す参加者もいた。実際、震災後に珠洲を離れても、行事のたびに駆けつける青年がいる。また、「もっと若い世代を集めることが、青年文化祭やのど自慢、そして珠洲市を盛り上げることにつながる」と未来を見据える声も聞かれた。

震災を経験した身として、私は復興に終わりはないと思っている。一度壊れたものがすべて元通りになることはなく、震災の傷は残り続ける。だからこそ、元に戻す「復旧」の先で歩みを止めず、新しい未来をつくり続けることが「復興」なのではないだろうか。

珠洲で出会った青年たちは皆笑顔だった。その笑顔に人が集まり、また笑顔になる。祭りを守り、人を結び、次の世代へ思いを受け渡していく。その姿に、青年団が果たす役割の大きさと、復興の一つの形を見た。

●佐藤和博（日本青年団協議会　常任理事）より投稿

震災復興×青年団

熊本地震ボランティアに参加して

熊本県八代市に、岡山県、熊本県、宮崎県の青年団が集まりました。9月に行われた災害ボランティア活動を、宮崎県から参加した黒木晏夏（あんな）さん、畑中哲哉さんが報告します。活動までの経緯は、6ページ「魅力発掘」をご覧ください。

9月20日～21日の2日間、岡山県青年団協議会（以下、岡山県団）、熊本県青年団協議会（以下、熊本県団）とともに、熊本県八代市で災害ボランティア活動に参加しました。

岡山県団が熊本入りした19日は、ボランティアに参加する岡山県団、熊本県団、宮崎県団の3団体で打ち合わせを行い、岡山県団が石川県でのボランティア活動を通して得た経験も共有されました。作業を行うだけではなく、被災された方の気持ちに寄り添うことを大切に活動しました。

シルバーウィークということもあり、ボランティアセンターには九州だけでなく全国から多くのボランティアが集まっていました。中には、以前被災した地域から「恩返し」の気持ちで参加している方もいました。

一方で、ボランティアからの支援を申し込んでから1か月以上待っている方もいます。現在も千件以上の依頼が残っていると聞き、継続した支援の必要性を感じました。1日目はブロック塀の撤去、2日目はそれに加えて家財整理を行いました。初めは「女の子が多いけど大丈夫？」と心配されていた家の方も、私たちが連携して作業する姿を見て、安心して任せてくださいました。「来てくれた気持ちが嬉しい」と言っていただいたことが印象に残っています。また、被災された方ご自身も大変な状況にあるにもかかわらず、ジュースや果物、パン、アイスなど、私たちのためにたくさんのおもてなしを準備してくださいました。「十分なおもてなしができなくて申し訳ない」という言葉もあり、その気持ちに胸が詰まりました。

公務員が多い熊本県団の皆さんも、仕事で災害支援に携わるなど忙しい中で参加してくださり、同じ青年団の仲間として一緒に活動できたことを嬉しく思います。

活動中、岡山県青年団の方が被災された方から「なぜボランティアに来てくれたの？」と尋ねられたそうです。その場では明確な答えが出ませんでしたが、活動後の車内でそのことが話題になりました。そこで出た言葉が、「青年団だから。困っている人を放っておけない」でした。その言葉が皆さんの共通認識であることに感動すると同時に、私たち自身も青年団活動の意味を改めて考えさせられました。

今回の活動を通して、ボランティアは作業をするだけでなく、全国からの応援の気持ちを直接届けることができるものだと実感しました。そして、被災地を応援する方法はボランティアだけではありません。現地を訪れ、観光を楽しみ、地域のものを食べることも、復興を応援する一つの形です。

全国の青年団とのつながりを大切にしながら、「困っている人を放っておけない」という思いを胸に、これからも自分たちにできることを考え、行動していきたいと思います。



依頼のあったご自宅に伺い、崩れ落ちたブロック塀の撤去を行う

黒木晏夏さん（日本青年団協議会執行理事／宮崎県青年団協議会会長）・畑中哲哉さん（日本青年団新聞Youth Post支局員／宮崎県青年団協議会副会長）より投稿

みんなの活動が集まる！

Youth

本号からリニューアルした『Youth』。
全国各地で活動する支局員が主体となって企画・編集するページです。各地の青年たちの学びや実践、想いを支局員自身の言葉で届けます。地元と全国がつながる発信の場として、皆さんからの投稿もお待ちしています！

学びのトピック

伝える～足を運ぶ～



支局員が各地から集めた活動や実践の学びをピックアップ！
今月のテーマは「伝える～足を運ぶ～」。
青年大会で、様々な人が参加するきっかけに大切なこととは？

高知県青年大会文化部門の意見発表の部には、今年も高知県に来て働いている技能実習生であるインドネシア出身のシャーラさんが出場し優秀賞に輝いた。県青年団で特に近年力を入れている意見発表は、役員が1人ひとりサポートにつき共に発表の方向性を見つけたり、発表の仕方や制限時間内にベストな発表ができるよう練習も行う。今回担当した事務局長の西村ひかるさんは何度もシャーラさんとの打ち合わせへ足を運び、時間を共に過ごした。発表者自身のことを引き出し向き合うことで人となりに深く触れることや、目標に向かって力を合わせ共に悩んだり新しい発見をする、この過程こそが西村さんにとっての何よりのやりがいにつながっている。シャーラさんは「ひかるさんと話をしながらアドバイスをもらい、一緒に作りあげたスピーチをみんなに伝えられたことが嬉しかった。」と明るい表情で語ってくれた。

●高知県青年団協議会常任理事・宮崎果七さん・20代

Youth掲示板

全国の仲間からの投稿コーナーです。
新聞の感想でも、地元の活動報告でも、
なんでもOK！
あなたの声を全国へ届けましょう。

愛知県では今年から「地域ユニット」事業がスタートしました。「仕事帰りに立ち寄れる距離感」をコンセプトに、隣接する市の青年団員が互いの活動に参加し合う取り組みです。物理的な距離の近さを、心理的な連携強化にも生かしていきます。



●愛知県青年団協議会・大松優樹さん・20代



8月の沖縄では、先祖を供養し送り出すエイサーが力強く舞われ、石垣島では、あの世から訪れる先祖を迎えるアンガマーが巡りました。無病息災を願う旧盆の伝統が、世代を超えて受け継がれ、島々を熱く彩りました。

●沖縄県青年団協議会　事務局・松元杏菜さん・20代

あなたの声をお待ちしています！

右記QRコードより情報をお寄せください。
※Googleのアカウントが必要です。

投稿フォーム

参加者の声



日青協事業に参加した支局員・青年団員のリアルな声をお届けします。
今回は第57回北方集会に参加した大分県団の阿南事務局長の等身大のレポートです。

北方集会で感じた「伝えることの大切さ」

北方集会（第57回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会）で一番印象に残ったことは、「羅臼町では、元島民1世の現役の語り部がいないこと」です。私が青年団活動を始めて、「戦争体験者などの高齢化が進み、直接体験の引継ぎが急務」と学んでから20年。当事者の声を直接伺える機会も失われつつある時代が到来したことを痛感しました。

今回の集会で、自分でできる形で学びを伝えることの大切さを知り、得意のSNSで連載企画として発信しています。全国の仲間へ、後世の仲間へ、元島民の想いを伝えることが、青年団として大切です。同じ日本の問題として、一緒に行動しましょう。



●大分県連合青年団　事務局長・阿南貴詞さん・40代

OPINION 全力のあなたに、エールを

コロナ禍から数年が経った。地域も友人も、時には家族までも分断されたあの時間を経て、私たちはようやく日常を取り戻した。以降、各地で少しずつ活動が再開してきた。今年も各地で道府県青年大会を開き、代表が決まった。それは、青年団活動が確かに再興してきた何よりの証である。ここまで歩んできた一人ひとりに、まずは心からの感謝を伝えたい。

がんばること。誰かを応援すること。ともすればそれさえもストレスやハラスメントと見なされかねない時代である。一人では踏み出せない挑戦も、声をかけ束ねてくれる道府県団があるからこそ、前へ進める。大会は競う場だけでなく、人と人が出会い、全力で挑む姿から支え合う絆が生まれる場となった。

青年団活動に携われる時間は、決して長くはない。仕事、家庭、育児、余暇――人生には、やりたいことがいくつもある。時には、こなさなければならないノルマもあるだろう。青年は、いつの時代も忙しい。それでもなお、青年団活動を選んでいること。それは人生の貴重な時間を、何に使うのかという問いへの一つの答えだ。

地域のつながりが薄れ、SNSで誰とでもつながれる一方、本音を話せる相手は見つけにくい。孤立や孤独が生まれやすい社会で、青年団活動を選んだあなたに伝えたい。あなたのことを、ちゃんと見ている。頑張っていることも、知っている。だから、決して一人じゃない。全国のどこかで、同じように汗を流す仲間がいる。そして、全国青年大会に出場する選手へ。あなたの後ろには、代表として送り出してくれた人たちがいる。11月13日、いよいよ大会が開幕する。全力のあなたに、心からエールを送る。

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 No.66

「学びのココロ」は続いていく

金澤 謙心さん（24）
（高知県青年団協議会お江戸支部長）

群馬県前橋市出身の金澤謙心さん。高知大学に進学後、学生団体「学生合同なぶら」と出会い、地域や社会とつながる空間の心地よさを知った。

かつて家庭環境や進学校の多忙さから体調を崩し、「家庭や学校以外にも、自分を受け止めてくれる居場所が欲しい」と思ったことが原点で、居場所づくりは彼の人生のテーマとなっている。2024年度に休学し、児童生徒の居場所づくり・学習サポート事業「学びのココロ（まなココ）」を立ち上げた。この名称には、子どもたちに寄り添うだけでなく、自分たち青年団や大学生も謙虚に学び続けるという思いが込められている。現在は後輩たちにバトンが渡り、県内各地の青年団と連携して、今夏は5か所で開催した。

この春から関東で社会人となり、全国まちづくり若者サミット2027の実行委員としても活動を始めた。青年団活動に参加する時、自分と向き合える場所があることにホッとするという。「学びのココロ」は、彼の中で、そして高知でも続いていく。離れても、思いは同じだ。

●宮崎果七支局員（高知県青年団協議会　常任理事）より投稿

若者サミットで待ってるよ！



全国まちづくり若者サミット Instagram

編集後記

本号のテーマは「ナイスファイト」。先日、高齢の祖父母に会ったからか、自分は自分にそう言ってあげられるような毎日を今、過ごせているだろうか、なんて思ったり。全青大でもたくさんのナイスファイトなみなさんの姿が見られるのが楽しみです。最近雨続きの東京が晴れることを祈りつつ、準備頑張ります。

今月号から支局員のみなさんとつくるリニューアル企画「Youth」も始まりました。感想待ってます。（H）

NISSEIKYO
最新の情報はこちら
https://www.facebook.com/nisseikyo01/

Recommend れこめんど

あまり知られていないすてきな場所や食べ物…地元のおすすめを青年団のエピソードも交えてご紹介します。



今回ご紹介するのは、富士山のふもと、山中湖畔に建つ「山中湖旭日丘温泉 ホテル清渓（せいけい）」です。1933年、日本青年館第3代理事長・井上準之助氏のご遺族の寄付により「清渓寮」として誕生し、「清渓」の名は井上氏の雅号に由来します。日本青年館の分館として、日青協主催のCheerUP！や全国青年問題研究集会の開催など、青年団とともに多くの歴史を紡いできました。

カラマツ林に囲まれた敷地には、温泉の大浴場や体育館、40基のかまどが並ぶ野外炊飯場もあり、研修や合宿にぴったりです。2027年1月から7月中旬（予定）まではリニューアル工事のため休館となります。新しく生まれ変わる清渓で、富士山を眺めながら、青年団の歩みにも思いをはせてみませんか？

リニューアル後はぜひお越しください。